

---

# 薦娘～トレパドーラ～

Ladybird girl

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薦嬢～トレパドーラ～

### 【Zコード】

N1174Q

### 【作者名】

Ladybird girl

### 【あらすじ】

目が覚めたら、破面・N0.6（アランカル・セスター）／第60刃（セスター・エスパード、ルピ・アンテノールに成っていた。

「グリムジョー…てめえ…」

このセリフだけは言いたくない！！

そんな野望を胸に秘め、彼は静かに歩き出す。

これは、数奇な人生を歩んだ1人の男のお話。

よりしへの願いしまさ

・暗い。

ここは何処なんだろ。

何も見えない。  
何も感じない。  
何も思わない。

そもそも、オレは誰だ？

名前、姿形、性別、性格、家族、友人、恋人、趣味・・・

全てが、記憶から消えている。

オレは何者なんだ？

分からぬ。分からぬ。分からぬ。

誰か、教えてくれ・・・

オレはなんでこんな所にいるんだ？

オレはなんで記憶がないんだ？

オレはなんで

何も感じないんだ？

記憶が無いのなら、喜べよ。怒れよ。哀しめよ。楽しめよ。

独りが辛いのなら、喜べよ。怒れよ。哀しめよ。楽しめよ。

全てを失つたかのよつた、この虚無感は何なんだ？

なんで、オレは

なんで、オレは

なんで、オレは

こんなにも、空っぽなんだ？

・・・嫌だ。

哀しいとは思わない、思えない。

でも、嫌だ。

この敗北感は嫌だ。

オレは負けてない。

負けたくない。

・・・欲しい。

嬉しいと思つ心が。

怒りたいと思つ心が。

哀しいと思つ心が。

楽しいと思つ心が。

全てが欲しい。

『オレは勝者だ』

## ハジマリ

闇に覆われた空間に、一人の男がいた。

歳は二十台後半といったところだろうか。

ダークブラウンの髪に、常に微笑みを絶やさない自信に満ち溢れた表情。

そして何より、全てを呑み込んで奈落の底に引き摺り落とすかのよう、暗い瞳が印象的であった。

「成る程、やはり睡眠状態である崩玉の穴を突く方法は存在したか

□から零れおちたのは、どこか他人事のよつて無機質な声。

その無機質な声は嘲笑っているとも感じられるが、彼の心情を詳しく知る人物がいたら、それは間違いであることに気付くであろう。

『歡喜』

彼は、確かに喜びを感じていた。

あの浦原喜助ですら扱えなかつた崩玉を今この瞬間、その力を自由自在に扱うことに成功したのだから。

「・・・名を聞かせてくれるかい。

新たなる同胞よ」

第1話

「ふわああ

大きく開いた口から、欠伸が零れる。

最近、徹夜続きの毎日であったので、久しぶりの熟睡はとても気持

ちが良かつた。

身体の調子も絶好調みたいで、異様に軽く感じる。今なら学校まで走つていけそうだ。

髪を搔きながら、ゆっくりと上半身を起し出す。

（今日は日曜日だし。久しぶりにゆっくりするか。貯まっていた録画分のドラマでも見ようかな？ そういえば、主人公であるジャックは敵組織に捕まつたままだったな。あれからどうなったんだろ？）

24という数字に凄まじいまでの執念を持つ、架空組織の捜査官の顔を思い浮かべながら、ベットを出て、洗面所で顔を洗おうとした瞬間、世界が止まってしまったかのような錯覚を覚えた。

何故なら鏡の中に写っているのは、19年間見続けてきた自分の姿ではなく、まったくの別人であったのだから。

「・・・えーと、誰？」

聞こえてきたのは、可愛らしい、女の子や子供みたいな声だった。

やはり寝ぼけていたのか、いややうに決まつてことと現実逃避気味に辺りを見回すと自分の部屋とは明らかに異なることに気が付いた。

散らかっていた筈の参考書や漫画は何処にもなく、昨日まで確かに使っていた筈のパソコンすらも無くなってしまつてい。

その事実が、否が応にも彼に厳しい現実を突き付ける。

（おいおい、何がどうなつてんだ！？何処だよ、此処は！…明らかにオレの部屋じやねーし、いつの間に移動したんだよ！…）

壁からドアにいたるまで白く、飾り氣の無い、生活感に欠けているような部屋だった。

テレビやDVDプレイヤー、ゲーム機等といった娯楽製品がまったく存在せず、ベッドやソファーといった必要最低限の物しかない。

（あれ？ テレビやパソコンがないってことせ、ドラマの続き見れな  
いじゃん！…・・・なんか、見れないと思ったら急に続きが気にな  
りだした！…くせつ、これが孔明の罷か！…なんて卑劣な奴なんだ、  
孔明といつ男は！…）

別の部屋にいたことよりも、途中からドラマの続きが気になりだした青年。

どう考へても今そんな事を考へている場合ではないはずなのだが

大丈夫か?この男・・・

そして、孔明はまったく関係ないだろ。

「はあ~」

(分かった、オーケー。把握したぜ。此処はオレの部屋じゃなく誰か別の人間、とゆーか今鏡に映つている奴の部屋で、オレは何故かその人間になつてしまつたと)

「信じらんないよ。いくらなんでも、あり得ない。でも

そこで言葉を区切り、もう一度鏡を見ると

相変わらず自分の顔ではなく、誰か別の人間の顔が映つていた。

確かなんだよねえ

この鏡に映る姿形が、オレが別の人間になつてしまつたことを示し

てこる。

「それにしてもさ、この顔って凄い整ってるよね」

鏡には、中性的な男か女か分からぬような顔が映ったまま、此方を見てこる。

黒い短髪と左側頭部に付いたアクセサリーみたいな仮面に藍色の瞳。

右眉の上には、ひし形の三つの紋様が描かれていて、まるで何処かのアイドルのような顔である。

白を基調とした袖の長い服を着ていて、映画やアニメに出でてくるキャラクターみたいだ。

彼は俳優でもやっているのだろうか？

そんなことを思つて、まさにその瞬間

「ルピ、気分はどうだい？」

後ろから、声が聞こえてきた。

慌てて振り返つてみると、ドア付近に一人の男がいた。

「儀式が終わつた後にいきなり倒れたから心配したよ。もう、身体は大丈夫なのかい？」

男は此方を労るかのような口調で話しかけてくる。

でも、オレはそれどころじゃなかつた。

男の圧倒的な存在感に、得体の知れない何かを感じとり身体中が悲鳴を上げているのだ。

少しでも気を抜くと、意識を保てそうにない。

（この体の持ち主の知り合いなのか？・にしては何処かで見たことがあるような・・）

「・・・気分ですか？」

「ああ、新しく手に入れた死神の力はどうだい？」

(死神? 何を言つてゐるんだ、この男は? )

「君は最上級 ヴァストローデ 級の中でも、特別な大虚 メノス  
グランデ だからね。少しばかり破面 アランカル 化するのに時  
間が掛かつてしま

・・・え?

ヴァストローデ?  
メノスグランデ?  
アカンカル?

・・・え?

ちょっと待て!!

落ち着け、オレ。

b e c o o l ! !

なんか、凄くいやーな予感がするんですけどー!!

先程聞いた固有名称と鏡で見たオレの姿形から察すると、もしかして  
の男いやこのお方は

「・・・藍染様？」

## ハジマツ2（前書き）

3話目です

よろしくお願ひします

「・・・藍染様？」

あり得ない。彼は漫画の中に存在する架空のキャラクターだ。現実に存在するわけがない。これまでのはただの偶然で、きっと彼は直ぐに否定するさ。自分は藍染なんて名前じやないと。

そんな、願望にも近い思いを込めて絞り出した言葉だった。

だけどそれは間違いで、彼は

「 なんだい、ルビ?」

藍染といつ名前だった。

もしかして、同姓の別人かもしれないかも？

・・・なんてそんな都合の良い偶然はないな。

此処まで、来たら認めないと云いのだろう。

この世界が、漫画『BLEACH』の世界であるという可能性を。

・・・とりあえず情報が必要だ。

何かこの世界がBLEACHの世界であるといつ、確固たる証明が。

「あー、えーと、そーいえばボクって何番になるんですか？」

確かに、一定以上の力を持つ<sup>アランカル</sup>破面は数字持ち『ヌメロス』だった筈。

人気キャラであるグリムジヨーも最初は数字持ち『ヌメロス』だった。

どういう経緯で十刃に昇格したのかは知らないが、それならグリムジヨーの後釜として第<sup>セスター・エスパー</sup>6十刃になつたルピ・アンテノールも始めは数字持ち『ヌメロス』だろう、多分。

「おや、言つてなかつたかな？君はノ・66だよ」

ノ・66？えらい後ろの方だな。確かに数字持ち『ヌメロス』の番号は生まれた順番だつて、エセ中国人っぽい奴が言つてたからかなり遅いのか？

原作で出てきた数字持ち《ヌメロス》はほとんど、十番台か二十番台だったからな。

そこで、ウルキオラとヤミーが最初に現世に襲来したのは、藍全が離反して1ヶ月後だった筈。

ルピは他の破面の回想にも出てこなかつたし、実力は有りながらも一番最後に十刃になつた人物だから、破面化されたのは遅いのかな。完全な崩玉で破面化されたと仮定してら、それはどんなに早くても藍染が離反した直後であるので、少なくとも最初の襲来の1ヶ月前より後になるしね。

ここが重要なのは襲来前か後かだ。

襲来後なら、このままグリムジョーの後を受けて、第6十刃なる可能性が高い。

そしたら、井上織姫によつて右腕が元通りになつたグリムジョーに殺されるんですね、分かります。ってヤバイじゃん！！

死亡フラグまで、一直線！！

何の対策も出来ず、ただ単に死を待つだけとか無いわ。

まだ襲来前なら、時間はあるし対策もある。

どれくらいの時間なのかは分からぬが、最低一週間あれば何かが  
変わるはず！…多分、きっと。

てか、変えないと死ぬだけだ。前のルピならまだしもオレはグリム  
ジョーに勝てる自信なんて微塵もない。

つーか、第6十刃セスター・エスパー・セフティマ・エスパーと第7十刃セスター・エスパー・セフティマ・エスパーつて実力離れ過ぎなんだよ…！

帰刃レスレクションしたら、弱くなるゾマリさんが相手ならまだ希望はあった。

少なくともルピの能力ならゾマリとの相性はいい。

グリムジョーと戦うなんて自殺行為をするくらいなら、ゾマリに死  
を覚悟して奇襲した方が遥かにマシだ。

「…ルピ、聞いてるのかい？」

やばつ、つい深く考え込んだよつた。

王様の機嫌を損ねたらしく、靈圧を解放して微笑んでくる。

つて怖いから…！

身体中がビリビリするんだよ、それ。

くせつ、勘弁してくれよ。

「『めんなさい。アランカル』に成ったばかりで混乱していく、聴いてまませんでした！！」

素直に誤る。

かの有名な歴代合衆国大統領リンカーンにこんなエピソードがある。彼はある日、父親が大切にしていた木を誤って折ってしまったそうだ。

でも彼はそれを隠したりしないで、父親に怒られるのを覚悟して謝る。

リンカーンの正直な心に感心した父親は逆に彼を褒めたという。

だから、全身全霊を持って謝る。

下手に言い訳するよりも、此方の方が心証は良いだろうとこう下心も勿論あつたが。

やつあると、藍染は靈圧を緩めた。

「別に気にしていなによ。ただ、君がこれくらいの靈圧を耐えることが出来るねか、試してみたくなってね」

とか抜かしやがった。

「マジで洒落にならんし。

「でも、やはり君は十刃並みの力を生まれて直ぐに持っているようだね。この靈圧に耐えうるなら第6十刃、セスター・エスパーダぐらいの強さ十分にあるだろ。期待してるよ。」

（こや、期待しないで下をこ。そして、十刃になんかはなりたくはないことだす）

「はははははは

「あつがとひいじれこまわ

とぬじておへ。

藍染の意志に反する答えをしたのが、東仙に伝わると殺されそうだ  
からな。

グリムジョーの時みたいに大義ある殺戮は許される、とか言って斬  
り掛かってきそうだ。

本当、狂信者って怖い。

きっと彼の頭の中では、

藍仙様 > > > > > 神 > > > > > 自分・市丸 > > > > > その他

となつているのだろう。

考え方をしていると、いつの間にか藍染はいなくなっていた。

全く気が付かなかったよ。

オレが未熟なのか、藍染が凄いのか。

・・・うん、きっと両方だな。

まだ少し聞きたいことがあつたけど、後で訪ねねばいいか。

「はあ～」

ベッドに倒れ込む。

「あー、疲れた」

さてと、先ずは情報収集と能力の確認だな。

## ハジマツ2（後書き）

誤字やおかしいと感じたこと、又は感想等気軽に書いて下さりね。

ちなみに破面に関する知識は Wikipedia から得ています。

『運営』に対する（評議會）

回路図ですか。

あるいはねじっこですか。

## 『運命』に出会った

彼女は笑う。

オレは嘆く。

「勘弁してくれよ」

平和は戦争への準備期間でしかないのなら、戦争は平和への準備期間でしかないのだろうか？

・・何が言いたいのかと言えば

オレは今日『運命』に遇到了。

本来は関わることのなかつた男と女、一人の出会いは何を変えるのだろうか？

何を得るのだろうか？

そして、何を失うのだろうか？

それは、オレが藍染との出会いから生命の危機を感じた次の日のことであった。

与えられた部屋で、能力の確認をしようと意気揚々としていたオレ  
だつだが、虚夜宮は藍染が監視しているんじゃなかつたけ？という  
非常に曖昧な原作知識に不安を覚えてたので、監視の目が届かない  
所で訓練しようと建物を出て砂漠を歩いていた。

ついでに藍染が離反してからどれくらいの時間が経つのか、十刃の  
メンバーの確認等の情報を教えて貰う為に他の破面アランカルも探していくけ  
ど、全然見つからないし凄く嫌だけどしようがないから後で藍染に  
聞くか、はー鬱だわ。とか思つていた時、

ドザア！！！

突然、砂漠の中から何かが出てきた。

「ばばばばばばばばばばー。」

そして、叫び声を上げながら、目もとを覆うようにフードを深く被つた人間らしき子供の姿と間抜けそうな破面達が目の前を走つていった。  
アラン・カル

「・・なつ・・」

(あれは確か・・・・・!)

逃げる子供とそれを追い掛ける変質者。

普通なら即通報ものの出来事だが、オレは「」の場面を見たことがある。

虚闇に到着した主人公達が虚夜宮に行く途中、出会った破面達だ。  
ウエコムンド  
ラス・ノーチエス  
アランカル

確か名前は、ネリエルとペーシとドンカンジだつたけ？

・・あれ?なんか違うような気が・・・

まあ、いいか。

彼らなら対応を間違えない限りは色々と教えてくれそうだ。

それに砂漠にアランカル破面なんて他にそつはいだろ？これ以上探すのもなんか面倒くさい。

つてことで、

「ねえ、ちょっと聞きたいことがあるんだけどー」

走って追いかける。

ルピの体のスペックは半端なく、前のオレならば絶対に任せないようなスピードだ。

流石、ヴァストローデ最上級級チート過ぎる。

この体なら、世界を狙えるな（スポーツ的な意味で）。

「な・・なんスか！－あんた！－」

いきなり現れたオレに驚いたのか、フードを取ったネリエルが話しかけてくる。

「突然ごめんねー。ちょっと、聞きたいことがあってさ。少し時間作れないかなー？」

オレは出来る限りの最高に爽やかな笑顔で尋ねる。

子供や初対面の人には笑顔が警戒を解く一つの鍵なのだ。

「ネ、ネルたつに聞きたい」と…? 何だけろ?」

「あつ! いいの? ありがとう。ボクの名前はルピ、ルピ・アンテノール。よろしくねー」

先ずは、自己紹介から。挨拶の基本だよね。

「どうもっス。ネルは破面アランカルのネル・トウと申スマスー!ー」

「ネルの兄のペッシュュです」

「その兄のドンドチャッカでヤンス」

「そんで後ろのデケえのがペットのバワバワっス」

自称3兄妹が挨拶した後に、ネルが後ろの芋虫っぽいのを指して紹介する。

「ネルにペッ・シユ、ドンドチャッカそしてバワバワだね。よろしくー。あつーで、聞きたいことなんだけさー藍ぜ」

キーン

なんだ、これ・・

# 靈庄？

ネル達の叫び声と共に、砂漠の中から一匹の虚ホロウが姿を現した。

モグラを機械化したような見た目で、鋭い爪が印象的である。

「ねえ？」のモグラ野郎は君達の知り合いなの？」

原作から考えて、多分違うと思つが念の為に聞いておく。

にしても、こいつ弱そうだな。只の虚ホロウか？

大きさだけならルピの身体の五倍くらいはあるのだが、あんま強さ  
そうに見えねえ。

「ち、違つつス。こいつはネルたつにイジワルするワルモノだア！  
！アジュークス級で物凄く強いんで、逃げることしか出来ねエんだ  
けろつ」

成る程、成る程。

やつぱ敵、つーかはぐれの虚ホロウか。

仮面は付けてることから考えて、アランカル破面ではないな。

よし、決めた！！

「キリヤー、ボクの部下にならない？」

いづれ、戦う敵の為に戦力が必要だしな。

調度良かつた。

(うわっ！！危な！！)

オレの言葉を聞いて、その鋭い爪で攻撃してくるモグリもゼミ

「あれ？ダメ？」

「ダ、ダメに決まってるつスよ！虚は自分より弱い奴には従わねえもの！アジュー力ス級ともなれば尚更ツス！！」

（・・つまつ、部下にあんなには倒すしかなこつてことか）

で、おしゃべり会へ？

オレがルピの体に憑依したのはつい最近、てか昨日だし。

ネル達から話を聞いた後に、能力の確認をしようと思つてたから、未だに自分がどれくらいルピの力を引き出せるのか分からぬ。

それに、例え運良く引き出せたとしても、一般人に過ぎないオレがその力を上手く扱えるのだろうか？

いや、今はそんなこと考へていろの場合じゃないな。

ぶつつけ本番で少し不安だが、やるしかないだろ。

ただ逃げるだけなら今のオレでも可能かもしれないが、それは所詮問題の先延ばしでしかない。

どうせいつかは戦わなきやいけないんだ。

こんな破面アランカルですらないアジューカス級に負けるようじゃ、この先生き残りれる筈がない。

オレの敵はグリムジョーや死神の隊長格といった更に高みにいる奴等なんだからな。

・・・よし、覚悟は出来た。

次はアイツにどうしたら勝てるかだ。

一番妥当な策としては、帰刃レスレクシオンをして本来の姿と力を手に入れることだが、レスレクシオン帰刃つてどうやつたら出来るのか分からん。

やはり、テンプレな感じの格好いい台詞と斬魂刀の名前を叫ぶのだろうか？

つて、うわっ！

少し考え込み過ぎていたみたいだ。

やうやうかとで逝たる所だつたし・・・

・  
・  
ん?  
?

## 攻撃が当たる？

・・・ちょっと待てよ。

そもそもオレはどうしてこんな雑魚の攻撃を避けなきやいけないんだ?

アランカル  
イエロ  
破面は、強固な靈圧硬度を持つ破面の外皮である鋼皮を持っている。

つまり、既にそれ 자체が『鎧』である為、強い者は斬魄刀を抜かずに戦うことが可能なのだ。

そしてオレは最上級の破面で、相手は普通のアジューカス級でしか  
ない。

そう思つたオレは、自然に歩みを止めていた。

オレが動きを止めたのがチャンスだと思ったのか、こじんぞとばかりにモグラ野郎は突っ込んでくる。

・・大丈夫だ。

あんな化け物が迫つてくるところ、何故か恐怖感は無い。

不思議と、安心感さえ感じてくる。

そうじてオレはモグラ野郎の攻撃を『無傷』で受け止めた。

『運命』に対する（後書き）

・・・いかがでしたでしょうか？

小説書くのに慣れていないので、変な所が無かつたか心配です。

誤字やおかしこと感じたこと、又は感想等気軽にお書きください。

お久しぶりです。

このサイトにある別の小説とタイトルが似ていると、指摘を受けましたので後ろに文字を付け足しました。

ついでに、あらすじも新しく書き直しました。

それでは、五話目です。

よろしくお願いします。

「頭が吹っ飛んだ」

目の前の虚<sup>ホロウ</sup>は苦しそうな声を上げて、地に伏す。

倒された虚<sup>ホロウ</sup>は元の人間の姿を取り戻して戸<sup>ソウル</sup>魂界<sup>ソウル・ソサエティ</sup>へ送られるのが通常だ。

しかし、何事にも例外は存在する。

滅却師<sup>クインシー</sup>、虚<sup>ホロウ</sup>、等の死神の斬魂刀以外で倒された虚<sup>ホロウ</sup>は消滅するだけ。

決して、戸<sup>ソウル</sup>魂界へ送られることはない。

文字通り、存在自体が消滅するのだ。

つまりオレが倒した、いや殺した彼が彼女はもう一度と笑えないのだ。

どんな極悪人だろうが、殺せば罪になる。

だから、例え相手が人間や**虚**<sup>ホロウ</sup>を喰らつた“悪”だとしても

殺せば犯罪だ。

・・・犯罪なのに、一つの命を消滅させたのに、どうしてオレは罪の意識をまったく感じていないのだろう。

思えば、始めから違和感は感じていた。

そもそも、違う身体になつていたのに鏡で自分の姿形を見るまで気が付かなかつたこと。

ルピと前の身体の差異によつての、運動への弊害が無いこと。

そして、何より

オレがこの世界を現実だと認識し始めてること。

あり得ない。

だって、ここは漫画の世界。

オレが『オレ』であった頃、確かにBLEACHといつも漫画を読んでいた。

それなのにだ。いくら、藍染に会ったから、自分が登場人物の一人だからといって、何でそんな簡単にこの狂った世界に馴染んでいるんだ？

自分がグリムジョーに殺される運命だと知った時、いざとなればゾマリでも殺してでもグリムジョーの後をついで第6十刃セスター・エスパーになるのを避けようつと考えていた。

靈圧なんて、非科学的でなんの根拠もないものをどうして普通に知覚しているんだ？

ホロウに襲われた時、恐怖よりも先に浮かんだのは力無き者への侮蔑と手下にしたいという遊び心。

おかしい。

おかし過ぎる。

オレは極普通の大学生だった。

何か事件に巻き込まれていたりしたわけでもなく

格闘技をしていたわけでもなく

本当にそこら辺にいるただの一般人だ。

自称とかではなく、家族も友人も恋人も普通の人だったし、小中高と趣味のサッカーである部活をして、現役の地方の中堅国公立大学に合格。

そんな、日本人の何割かが通る平凡な道を歩いてきた。

だから、これは何かの間違いだ。

オレの一撃によって頭が吹っ飛んで消滅した虚ホロウに対して感じたことが、ゲームに飽きた時と同じような気持ちだなんて事は。

そんな、快樂主義者みたいな考えがオレの中にあつたなんて嘘だ。

嘘だ！！！嘘だ！！！嘘だ！！！嘘だ！！！嘘だ！！！嘘だ！！！

「ア、アア、アアア、ア、アアアアアアアアアア  
！」

チガウ。

ボクこそがタダシイ。

ショウシャであるボクがルールなんだ。

頭ガワレル。

オレは誰ダ？

誰だ？・・・絵里？

「・・・ひつ」

「・・・れるス・・・起れるつスーーー！」

誰かの声がする。

「・・・・・るス」

なんだれり？

「・・・・・ス」

「あつ、起きたっス？」

目を開いて、最初に見たのは心配そうな表情を浮かべた褐色肌の少女だった。

「・・・ネルか」

彼女の後ろにはペッシュュやドンドチャッカ、バワバワも居た。

体に付いた砂を服の袖で叩きながら、起き上がる。

白い砂漠のど真ん中にオレ達はいた。

何で、こんな所で寝ていたんだろう？

確かに、襲い掛かってきた虚<sup>ホロウ</sup>を倒した後、何か大切なことを考えていたような・・・

「・・・ダメだ。」

思い出せない。

「ねー、ネルにペッショ、ドンドチャッカそしてバワバワ。ボクつてどーして、こんな寒そう場所で寝てたか分かる？」

オレと一緒にいた彼らなら知っているかも知れない。

「えっと、ルピはアジユーカスを倒してから急に倒れたっス。なんが頭をがかえて叫んだんだあ。大丈夫ける？」

おいおい倒れたつて、大丈夫かよオレ。

思わず身体を押さえる。

・・・今の所、特に違和感とかは感じないな。

ふー、良かつた。

「うん。大丈夫みたい。『めんね。心配かけて』

「うんや、無事で良かつただあ。これでルピも一緒に遊べるっス」

・・・は？

「やうだな、これからはもうと面白くなつそうだ」

「楽しみでヤンス」

ネルに続くよひに、ペッシュコビズンドチャツカも言ひへ。

「え、遊ぶつて何の話？」

「何言つてんスか！ルピはネルたつの命の恩人でねえか！だか  
ら、これからは兄弟だける！」

「やうだな。ルピは私達の弟だ」

「これからは、四兄弟でヤンス～～！～！」

・・ちよつ、何勝手に決めてんだよ。

「待つてよ。キニ達。ボクの意見は聞かないのかい？」

原作キャラと兄弟とか、どうみても死亡フラグです。本当にありがとうございました。

じゃ、なくて…！

ネタをやつてる場合じゃねえ…！

責めて、友人的ポジションにしないと。

てか、なんていきなり兄弟なんだよ。

なんかいつ、そこまでの過程とか、飛ばし過ぎだろーー！

「・・・ルピはネルたつと兄弟になるのがイヤつスか

なんか涙田になってるネルさん。

えー。そこで泣くのはズルくね？

くそつ、なんか罪悪感が半端ない。

心なしか、ペッシュュ達も氣落ちしているように見える。

あー、もひ。分かったよ。

「ネルよりは兄だよね？」

「え？」

をい。聞きなさいよ。

「・・・いや、だから四兄弟なら三番目だよな」

少なくとも、ネルよりは見た目年上だ。

最も、アランカル破面に見た目と年齢は必ずしも比例しないけど。

オレの言葉を聞いた、ネルは悲しそうにしていた顔を徐々に笑顔にしていく。

「勿論つスー！」

つたぐ、嬉しそうな顔をしゃがつて。

つか、鼻水拭きなさい。仮にも女の子なんだから。

ティッシュやハンカチはないから、服の袖でネルの小さな顔を拭く。

・・にしても、原作変えちゃつたな。

まー、今さらか。

これで、オレの持つ唯一絶対の武器である未来の知識が役に立たなくなるかもしねー。

前途は多難だ。

「はー、勘弁してくれよ」

そう嘆きながらも、何故かオレの顔は笑っていた。

以上、原作キャラとの初めての出会い一篇でした。

ネル達の口調がよく分からぬ。

多分、あつてると思うのですが・・

誤字や、おかしいと感じた所又は感想等気軽に書いて下さいね。

お久しぶりです。

なんとか、一週間以内に間に合いました。

6話です。

それでは、よろしくお願いします。

白と黒が織り成すモノクロの世界

其処に一人の人物がいた。

白骨のようなもので身体の大半を覆つた、小柄な人間。

僅かに見える顔は中性的で非常に整つており、男なのか女なのか判別が付かない。

一方、そんな彼の正面に立つのは白い死霸裳を着ている青年。

茶色の髪を後ろに流して、一房だけ前に垂らしている。

「もう理解して貰えたかな？キミは私より弱いということを

死霸裳を着ている青年は語る。

まるで、駄々を捏ねる幼子を諭すような口調で。

「くそつ！――くそつくそつくそつくそつくそつくそつくそつ、なん  
でなんだよ！――！」

それに対し、白骨の彼は顔を歪めて悔しそうに叫ぶ。

「あり得ないから。こんなことがあるわけが無いよ。だつて、ボク  
が『勝者』なんだから。それ以外の奴らなんてみんなクズ、負け  
犬、ゴミだ。ボクだけ、ボクこそがこの世界で唯一絶対の存在なん  
だ！！」

「・・・

「なのに、なんで？ボクは負けたんだ！！信じられない。イヤだ。  
負けたくない。ボクは

『勝者』

なんだあああ――！」

彼は手の先から、自身の必殺の一撃ともいえる虚閃を発射する。  
ロード

この技で、自分に歯向かう馬鹿どもを何度も殺したきた。

直径30?の大きさの靈力の塊が派手な音を立てて男にぶつかる。

衝撃で風が舞つた。

「ハアハアハアハア」

力を使い過ぎたせいか、息を切らしながら相手の様子を伺う。

さつきの虚<sup>セロ</sup>閃には、普段よりも更に大きな靈力を込めた。

これなら、いくら相手が強いといっても無傷では済まないだろ？

そう思った。

なのに

「やれやれ、本当に仕様のない子だ」

目の前のこいつは何事もなかつたかのよつこ、微笑ましいものを見たという顔でこちらを見ていた。

「・・なんで? なんでだよ。どうしてキミはボクよりも強いんだ」

誰かに教えを請うなんて屈辱的だつた。

でも、それ以上に知りたい。

どうすればこいつのように強くなれるのか。

『勝者』であることが、ボクの存在理由なのだから。

「簡単な話さ。強く在りたいのなら、私が君に力を与えよう。勝ちたいのであれば、私が君に力を与えよう。勝ち

だから、

私と一緒に来ないかい?』

夢・・・か。

月の光を浴びながら、田を覚ましたオレはなんとも言えない気持ちになる。

夢というよりも、正確にいえばこれは『記憶』

この身体の持ち主、ルピ・アンテノールの記憶だ。

オレが憑依する前の、彼の物語。

脳ミソに身体に靈圧に刻み込まれたかつてのオレじゃない『ボク』である。

今回ば、藍染との出会いの話だった。

今まで、誰にも負けたことのない『勝者』が敗北を知った日。

そして、更なる力を求める切っ掛けとなつた出来事。

オレは初めて<sup>ホロウ</sup>虚を倒したあの日から、毎日寝る度に夢としてルピの

記憶を見るようになった。

だが、まあそれも全部というわけじゃなく飛ばし飛ばしながらだが。

最初は、ボクが初めて虚ホロウを殺した所から始まって

メノスグランデ  
大虚になり

アジュー・カス級に上がつて

ヴァストローデ  
最上級に至る。

それは、ピースの欠けたジグソーパズルのように継ぎ接ぎだらけの記憶でしかない。

でも、オレにとって見れば目から鱗の情報だった。

靈力の扱い方

セロ  
虚閃の撃ち方。

それから応用して得た、  
ソード  
響転ソード  
や探査回路の使い方。  
ペスキス

破面専用といわれる応用技のそれらも、全ては靈力の扱い方の一つでしかなく思いの外、簡単だった。

最も、何かをやうとする毎にルピのチートな肉体の恩恵を得ていた感は否めないけれど。

「ルピ、おはよりでヤンス」

詮索とした思考の海から、引き揚げられる。

気が付けば、田の前にドンドンチャッカがいた。

「あれえ？ キミつて起きてたんだ。影が薄くて分からなかつたよ」

彼は相変わらず、起きるのが早い。

ユダレを垂らして幸せそうな顔をして寝ているネルや

「フフフ、これからは私の時代だあーー！」

とか寝言を言つてゐるペッシュショウよりも全然頼りになる。

見た目は一番へんてこなのに、常識力の高さと面倒見の良い性格から、四兄弟の一番上が理に適つている。

「ひどいドヤンス。ずっと前から起きていたドヤンス」

「アハハ、『めん』『めん』。今日は藍染様の所に行かきやいけないと  
思つと、鬱でさあー」

ネル達は藍染の事を殆ど知らなかつたので、今が原作のどの辺なんかは未だに分からないままだ。

なので少し前、現世に行く予定はないのかとぶつちやけて聞いたら、  
今はまだ時期じゃないと遠回しに否定された。

今はまだといつてはいづれ、現世に行く予定があるといつてだ。

だからオレはそれまでに、やらなければならぬ事がある。

しかも出来る限り早急に。

「じゃあ行つてみるよ、ドンドチャヤッカ。ネル達によろしくね

挨拶はさう気なく、自然に、今まで通り。』

永遠の別れなんてわけじゃないし、直ぐに戻つてくる。

だから、こんな感じの適当が一度良んだ。

今回は、次の幕が上がるまでの一時の休息みたいなものでした。

シリアスばかりだったので、疲れました。

もつとギャグが書きたいです。

誤字、おかしなところ、又は感想等があれば気軽に書いてね。

## ねむけ（前書き）

なんか唐突に書きたくなつたので、書いてみました。

基本ギャグですが、評判が悪ければ削除します。

おまけ

や、こひらじま。あ、

オレの名前は志波陸鷗、志波家の次男です。

今日はオレ達、志波家の一日を紹介したいと思こます。

では、はじめまして。

「ミニヤミニヤ」

あついたりな寝声をだしたながら寝ている少年の名前は、志波海燕

「兄貴、起きる」

未だに寝ている寝坊助の腹に、手加減なしの蹴りをたたき込む。

「グホッ……」

彼は蛙が潰れたような声を上げながら、布団から飛び出て床を転げて壁にぶつかった。

「てめつ、ふざけんな陸鷗。もつと一寧に起しせつて、こつも言つてんだらうが……」

「ひつやう、兄はほんざいな扱いに腹を立てているようだ。

でも問題ない。この家の彼の地位は底辺であるからな。

「氣にすんな。オレは氣にしないから」

爽やかな笑顔で返す。

「ぶつ飛ばす……」

額に青筋を立てながら、キレる兄。

助走から、一気にオレの顔めがけて飛び膝蹴りをしてくる。

「ふつ、馬鹿め」

顔をひねつて躲す。

兄貴は単純なので、いつも同じ場所を狙う

よつて、躲在なんて造作もないのだよ。

教えないけど。

「今、何かしました？」

ムカつぐどや顔をする。

「也——！」

うおっ、兄貴が猿化した。

ブン！

「おひと、危な」

猿化すると、スピードが二倍になる兄の拳を紙一重で避ける。

「足元がお畠守じゃよ」

必殺！！『ヤムチャの一撃』

隙だらけの兄貴の足を払つ。

「うがあ――――！」

ダメージはほぼ無いに等しいが、ネタキャラ扱いされた兄貴が更にキレる。

肌がどんどん赤く染まつてこき、頭に角が生えた。

やっぱ、『エヴェ』『ザク』になると兄貴のスピードは二倍だ。

仕方ないぜ。

こっちも、切り札をだす。

「...」  
「...」  
「...」  
「...」

「アーティストの死」――死んでしまったアーティストたち

ドアを開けて、大声を出しながら黒髪の少女が入ってくる。

「あー、クーチャんねばよー」

愛しの妹、志波空鶴オレッ娘、幼女、  
シンデレとこう無敵のトリプルコンボを持つ我が家のアイドルだ。

「おはよー、じゃねえ……むつ、ヒツヒツ飯は出来てんだよ。早く来やがれ……！」

## おめか（後書き）

後悔はしているが、反省はしていない（キリッ

お久しぶりです。

更新遅くなつて「めんなさい」。

新作とかアホな事をやつていて、遅れてしまいました。

設定だけなら、いくらでも浮かんでくるのですが文章が・・・ちょっとみたいな感じです。

では、7話をどうぞ。

To be or not to be, that is the question

「ねー、死んでくれない?」

セブティマ・エスパーダ  
第7刃ゾマリ・ルルーは耳元で囁かれたその言葉に、言い識れぬ  
不安感と本能的な恐怖感を覚えた。

突如として、押し寄せてくる悪意。

それは、自身が最もよく理解している感情の一つで、『殺す』という明確な意志そのもの。

純粹な何の混じりけの無い殺意。

理解はしているが、不意討ち気味に食らつたそれにより一瞬身体の動きは止まる。

たつた一瞬。

だが、それは強者を相手にする場合は余りにも大きな隙だった。

『ぐしゃ』

体の肉が無理矢理抉り取られるような、そんな感触が身体中を支配した。

咄嗟に自身の肉体を見てみよつとして

其処に移っていたのは

一切の光の無い、絶望の色。

彼は気が付く。

「・・・田があ・・・田があ、あ・・・・」

両眼が無くなっていたこと。

（なんだ、何だこれは…！）

噴き出す赤い血液が、顔や服に掛かる。

（あり得ない。私は第7十刃だぞ！！）

踊るように身体をふりつかせるゾマリ。

それでも十刃としての意地が、自分を殺してきたであらう敵に意識を向ける。

「・・・何者です？」

「アハツ、何者です？その問答に意味は無こと思つよ。キリは今日ここで死ぬんだから」

「それでも敢えて名乗るとするのなら、そうだね

第7十刃 セブティマ・エスパーダ

ルピ・アンテノールかな。

よろしくね

闇からの襲撃者、ルピ・アンテノールはそう言って死闘装の長い袖を前に突き出す。

「じゃ、バイバイ。

王虚の闪光  
グラント・レイ・セロ

刹那、血のように紅い閃光がゾマリ・ルルーの身体を包み込んだ。

時計の針は、一時間程巻き戻る。

彼、ルピ・アンテノールが第7十刃であるゾマリ・ルルーを強襲す

セブティマ・エスペーダ

る前のお話。

白一色で彩りられる廊下を歩きながら、ルピを思考していた。

議題は自らが生き残りの上での最善とは何か。

忠実では『オレ』じゃない『ボク』であるルピはグリムジョーに殺されてしまったわけだが、それはあくまでも未来の可能性の一つでしかない。

『オレ』が存在している時点で辿るべき道筋は分岐し、原作とは違う様々な未来が可能性の一つとして存在している事になる。

事実、オレはネル達と出会い、既に原作の道筋とは剥離し始めるしな。

『ボク』が通る道筋の結末が、グリムジョーに殺されてしまうパターンだとして

それを徹底的に壊してしまえば、その先に待つのはまた別の可能性なんじやないかとオレは考えている。

だが、忠実でのルピの、人間関係、地位や言動、それら全てを把握して壊す 異なる人間関係、地位を築いたり、異なる言動を行う等はとても難しい事だ。

何故なら、BLEACHという漫画には彼に関する描写が殆どない。

『ルピ・アンテノール』とは26巻で初登場していきなり表紙を飾るも、次の27巻では死んでいるという不遇の立場だ。

所謂、一発キャラという存在。

物語的に、居ても居なくとも対して影響はない。

そんなモブキャラである人物は当然、詳しく取り下げられない。

故に、『ルピ・アンテノール』に関してオレが持つ知識は

- ・ルピや彼の斬魂刀の名前や姿形

- ・市丸ギンとよく話す

・ルピ自身が第6十刃セスター・エスパー・ダであるにも関わらず、グリムジヨーを6番さんとわざと間違えて呼んだりして、馬鹿にしていた。

・自らの力に過剰なまでの自信を持つていて、油断しやすく不意討ちに弱い（実際、原作では口番谷やグリムジヨーにも不意討ちでやられた）

等で、かなり少ない。

これくらいの情報では、せいぜいが

・ルピの力を使う時に、イメージしやすい。

・市丸、ギンと話さない

・グリムジヨーを馬鹿にしない、とこつか関わらないようにする

・敵は倒せる内に倒したおく。不意討ち上等。常に周りを探査回路ベスキスで警戒しておく

ぐらこしか、出来る」とはない。

いや、これだけあれば十分か？

特に、<sup>ペスキス</sup>探査回路は重要だ。

びつせなら、常に展開して使い慣らしておぐ。

呼吸をするように、<sup>ペスキス</sup>探査回路が出来るようになれば、大抵の攻撃は事前に察知出来る筈だし。

それと不意討ち。

基本的には油断している相手に響転<sup>ソード</sup>を使い、其処から容赦のない一撃を叩き込む。

確かに、響転<sup>ソード</sup>はウルキオラのセリフから靈圧感知に触れることなく移動することができる模様だつたしな。

隙だらけの間抜けなら、簡単に倒せるだろ。

さてと、じやあ殺るか。

“  
響  
転  
”

「弱  
つ

先程、放った王虚の闪光のせいで抉れた地面を見ながら、オレは余りにも上手くいき過ぎた現状について口から言葉が漏れる。

探索回路で調べた所、まだ微かに靈圧を感じるから生きてはいるのだろうが、想像以上に相手は弱かつた。

いくら、靈圧を消した上で不意討ちだからとはいえ、こんなあつさりやられるもんなのだろうか。

今回の敵は今まで戦つた破面アランカルですらなかつた大虚のメノスグラントのような雑魚ではなく、虚の上位種とも呼べる破面の頂点に位置する十刃エスパーの席に座る一人だというのに、なんか拍子抜けした気分になつた。

十刃エスパー、皆こんなに弱いのか？ それとも、ゾマリが飛び抜けて弱いだけ？

まあ死んだわけじゃねえし、第一彼はまだ帰刃もしてないから、油断は禁物だな。

静かに、だが集中力を高めながら前方を注視する。

辺りを覆い尽くしていた白い煙 碎けた靈子よつて生じた粉塵、  
は周囲に散開していく。

徐々に鮮明になってゆく視界の中に映ったのは、両目を失い、所々  
服が破け、全身から血を流すゾマリ・ルルーの姿だった。

「・・ぐつ、じまつじほー！・・ハアハアハア・・・」

「あれ？ 隨分息が切れているようだけど、大丈夫？ エスパー十刃さん

ルピの本領を發揮し、相手から冷静な思考を奪う為ゾマリの性格を  
考慮して、最も効果的な挑発を行う。

乗つてきたら儲け物、そんな感覚で。

「・・・だ、黙りなさい。賊め！！私を先程の不意討ちで殺し損ね  
た事を、精々後悔しなさい」

乗っちゃたよ、プライド高過ぎだらこつ。

死亡フラグ真っ先の台詞を叫んだ後、ゾマリ・ルルーは胸の前へ刀を浮かべ、手のひらを胸の前で合わせ、さながらヨガを思わせる構えをとった。

「 鎮まれ『呪眼僧伽』」

直後、首が横に90度倒れ、刀がひし形にへし曲がる。

そして、その状態の刀から噴き出した液体が身体を包み込む。

全身が白いスースに包まれ、目元に下顎の仮面紋に似た模様が浮かび上がり、下半身が幾つもの人面を持つ巨大な南瓜の様に変化した。

同時に、既に潰れてしまつた顔にあるものも含め50以上の目が全身に出現している。

肌を刺すような靈圧が空間を響かす。

采は投げられた。

To be or not to be, that is the question.

いよいよ、本格的な戦闘の始まりです。

苦手な戦闘描写をどんな風に書くか悩みます。

感想、おかしな事や誤字等気軽に書いて下さい。

待っています。

それでは、次回まで。

(前書き)

八話、  
投稿。

頭が痛い。

ひどく、頭が痛むんだ。

何かが、塗り替えられていく。

ゆつくりと、だが確實に。

青かった空は、二つの間にか灰色に変わっていた。

苦しい。

何でオレがこんな目に遭わないといけないんだよおお。

苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい

どうすれば、この苦しいから逃れられる？

誰か教えてくれよ。

受け容れなさい

全てを

声が聞こえた気がした。

暗転

「セト、ハジメよウ」

それが、自身の魂に刻まれた根底たる考え方だ。

この世界には、"支配する者と支配される者" が存在する。

自身の五十はある、"田" は支配者たる「口」の象徴だ。

高速を超えた音速で動くルパン。

ゾマリは見る。

だから、ゾマリはただ見るだけで良い。

何故なら支配者たる自分にとって、世界とは思い通りに動く人形劇でしかないのだから。

アモール  
愛

その目で見つめたものの支配権を奪う能力。

これであのクソ生意気なガキを見て、その身体 爪先から髪の毛一本まで支配するのだ。速さとか力とか、ゾマリにとつては何の意味も無い。

全方向にある“目”は一斉に発動させる。

これで、相手がどんなに速く動いていようと死角は無い。

たとえ、ルピの響転<sup>ヒーラー</sup>に身体が反応しなくとも、見るだけで相手は自身に頭を下げる。

ああ、踊りさない

憐れな子羊よ。

「<sup>アモール</sup>  
愛発動」

グシャ

何かが潰れたような音が響いた。

赤い雲が、地面に触れる。

「なん……だと……！？」

血を流したのは、又もやゾマリの方だった。

……そんな馬鹿な！！

ビリやつて私の支配から逃れたところのだ！！

あり得ない！！あり得ないあり得ないあり得ないあり得ないアリエなイアリエ  
ナイ！！！！

下を見る。

自身の胴体に深く突き刺さる“白い何か”

それは、地面から生えていた。

なんだ、あれは！？

一体何処から？

「余裕だね。敵を前にして、よそ見なんて」

頭上から降つてきた声に顔を上げると、敵であるルピ・アンテノールが此方を醒め切つた目で見つめていた。

ヤバイ！！

直感的に何か底の知れない恐怖を感じたゾマリは叫ぶ。

「……慈悲を！！私に慈悲はくれないのか！？元々、襲い掛かってきたのはお前からだろ！！だから、頼む！！慈悲をくれ！！」

殺される。

そつ思ひと、自然と口から情けない言葉が出た。

「いいや

……<?

「無駄な殺しかしたくなー?それじゃ、ほら?

「わへ、君に興味ないし

そりゃ、ルピはゾマリに首筋を向けて歩き始める。

「じゃあねー

まるで、先程の出来事なんて無かつたかのように、軽い感じで右手を上げ、能天気な声で別れの挨拶を言つて去つて行く彼。

それが、ゾマリには何よりも恐ろしく感じた。

「うひゃー、うひゃー。

「ア、アイゼーーン……！」

互いの刃と刃がぶつかり合って、甲高い音が響いた。

「おや、ルピじゃないか。どうしたんだい？ そんなに、血相を変え  
て」

「だまれ、オマエ、オレにナにをシた？」

「さて、何の事かな。質問はもつと、正確に頼むよ。ルピ・アンテ  
ノール」

刀を振り上げる。

「シね」

「酷いな、君は」

男の指先で、捉まれる刃。

人差し指と中指の間で、1?も動かねえ。

「クソツタれ、クビレ

薦 ≪トレパ

「砕ける、鏡花水月」

…チくショウ… イシキガ…

「全て忘れて、ゆづくらと眠りなさい

久井 良

翌日

ラス・ノーチエス  
虚夜宮に住む全ての破面に、第7十刃ゾマリ・ルルーの十刃落ち ≪セブティマ・エスパード  
プリバロン・エスパークダ≫への降格と、それに伴なう、数字持ち ≪ヌメロス≫の一人であつた第66番ルピ・アンテノールの第7十刃への昇格が知らされた。

世界は変革する

『勝者』の手によって

だれよりも傲慢に。

偽りの物語は幕を開けた。

(後書き)

今回はカオスでした。

なんで、こうなったのかなあ?

読者様の反応によつては、書き直すかもしれません。

すこません m (—) m

ちなみに、今回の話までがプロローグです。

## お知らせ

作者の赤河 沈です。

私自身のスランプや読者様の感想等もあり、本作品は一度、プロットを練り直す事にしました。もしかしたら、全話改定するかもしれません。

この作品を楽しみにしてくれていた方々、本当にごめんなさい。

お詫びといつてはなんですが、本作品と同時進行で進めていた新作を投稿しました。

こちらは、既に4話程出来ているので、早目に投稿出来ると思います。

ちなみに、新作は河下水希先生原作の『いちご100%』で、主人公の友人である人物に憑依します。

シリアルスあり、笑いありの、ラブコメディをを目指して頑張りますので、どうぞよろしくお願ひします m(——) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1174q/>

---

薦壇～トレパドーラ～

2011年4月7日19時33分発行